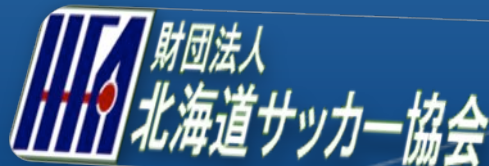


2011 北海道トレセン 道外遠征 U-15

【報告者】 鈴木 貴浩(監督)
小池 敦(トレーナー)

2011年11月18日～20日

会場： 東洋大学板倉キャンパス・埼玉県鴻巣陸上競技場
流通経済大学柏高校



HEARTS & RESULTS

～心と結果～

1. 事業の概要

今年度から、道外遠征の実施年代をU-14からU-15へ変更し、この年代の北海道代表活動に、他県とのマッチを通じた強化を取り入れることにした。これは、来年のぎふ清流国体を視野に入れた北海道代表チームの強化でもある。

宿泊先を埼玉県とし、初日をトレーニング、2日目を群馬県・埼玉県、3日目を千葉県の各U-15トレセンとのマッチを、各会場に移動して行った。



2. 事前の準備

召集した選手達は、所属チームおよびトレセン活動でのパフォーマンスをベースに18名セレクトした。選手達は、これまでのトレセン活動で寝食を共にし、各年代の活動と一緒にプレーはしているが、私(鈴木)がU-16北海道代表チームの監督として対外試合をするのは初めてであった。

今回の合宿に向けた準備として、まずスタッフ間の意思統一を図るべくトレセン活動での空いた時間などを活用しながら、ミーティングを数回実施し代表チームとしてのスローガン・コンセプト・目標を伝え、この強化合宿の準備をした。準備といっても、召集した選手達が、チームとしてどんなプレーができるか

北海道での一貫指導をブロックトレセンから！！
日本代表とオリンピック代表を2015年までに輩出する！！
和歌山国体(2015)までには優勝を！！

未知数の中、多くの事を求めて行くのではなくどの程度の実力があり、どの部分が全国で通用するのかを分析していくことに主眼をおくように強化試合の位置づけをしようと確認した。

3. 初日のスタート

(1) ミーティング

このキャンプで、ただ三試合を消化するのではなく、スタッフ間で重ねたミーティングをベースに選手達がどの程度の理解をしてプレーしてくれるかを見るために、到着日のトレーニング前に自己紹介もかねてミーティングを実施した。選手に伝えたことは、まず目標として、非常に高い目標設定かもしれないが、優勝するという。次に、優勝するためのコンセプトはチームとしての一体感が不可欠であるということ。最後に、全員が意見を持ち全員が監督・選手として行動していくこと。これらを実現するために、Heart&results というスローガンを伝えた。この意味は、常に結果にこだわり、全てに感謝し、大切な仲間と目標を達成する強い心を持つということである。以上を伝え 2泊3日の合宿をスタートした。



(2) トレーニング

初日のトレーニングは、上記をベースに守備意識のイメージを共有していけるように、2v2+2 サバーのトレーニングをし、全員がボールを奪いにいきながら、チャレンジとカバーを連続することを伝えた。次に 8v8+GK のゲームを(縦 105m、横 50m)しながら、奪いに行くとき、行けないときを全体で確認した。最後は私(鈴木)も含めたスタッフを補充し 11v11 のゲームの中でコンセンサスを深め、非常に雰囲気良く初日のトレーニングを終えることができた。



4. ゲーム

11月19日(土)第一試合

vs 群馬県トレセン U-15 (35分-35分)

● 1-2 (0-0・1-2)

このゲームは、選手たち自身がメンバーを決め試合に挑むことにした。選手達は、自ら話し合いセットプレーなども含め試合に向けた準備をしっかり行っており、所属チームの指導と同時に、これまでのトレセン活動での ON と OFF の指導の成果だと感じさせてくれた。まず守備面は、昨日からのミーティングをベースに皆が奪いに行く姿勢が出ていた。しかし、チームとしてのコンセンサスがないうちで、どの位置から、どの局面で奪うかがはっきりしていないため、マークのずれが生じ崩される局面があった。攻撃面は、コンサドーレ札幌の倉持選手を中心に常に優先順位の前を選択に入れながら、慌てずに細かく組み立てて行く攻撃は全国でも通用する部分と感じさせてくれたが、決定的チャンスに決め切れないという課題が見つかった。



第二試合

vs 埼玉県トレセン U-15 (35分-25分-25分)

● 2-4 (1-2・0-1・1-1)

このゲームは休憩時間も少ない中でのゲームだった。到着後にゲーム開始まで少ない時間だったが、ゲーム全体のミーティングをした。守備面、チーム全体での奪いどころ、その奪いどころにチーム全体がどうずれて行くのか、常にアラートな状態で連動するイメージを共有した。攻撃面、フォワード 2 人の役割分担を伝え、一試合目で良かった部分プラス、裏へのアクションとボールの供給の量を増やしていくことを伝えた。また、最前線の確率が低い時にサイドのミッドフィールダー及びサイドバックの関わりを提示し、ボランチを中心にゲームを作ることを伝えた。選手達が良く理解し、一試合目よりも守備及び攻撃で数段積極的な関わりをしてくれた。

11月20日(日)

vs 千葉県トレセン U-15(35分-35分)

△3-3(0-2・3-1)

昨日の二試合目で良くなった部分が更に良くなり、非常に良いスタートを切ったが、最終ラインの連携およびミスから2失点と苦しい展開で前半を終了した。しかし、常に結果に

こだわり、全てに感謝し、大切な仲間と目標を達成する強い心を持つことと伝え、それが結果として表わすことができたゲームになった。後半も失点され一時は0-3になったが、皆を信じ勝つという結果に向け全員が最後まであきらめないプレーをしてくれた。連戦や移動

での疲れもある中、後半の残り10分で1点を返した後は運動量上がり、ゴールに向かっていく姿勢が強くなり終了間際に同点に追いつき、結果的に引き分けに持ち込むことができた。このことは、このチームにとって大変大きな収穫だといえる。



5.コンディショニング

今回の遠征では、怪我を抱えたまま合流した選手が少なく、チーム全体としてコンディショニングのよい状態でスタートできた。

このキャンプでは、育成年代ということでよいコンディショニングを維持するための自己管理の方法を指導していくことに取り組んだ。また、今



回のメンバーの大半が遠征後に高円宮杯を控えており、余計な怪我をさせて自チームへ戻さないということも目標の一つとした。

実際の取り組みとしては、ウォーミングアップ、クールダウンの徹底、宿舎に戻ってからもストレッチやアイシングを促すように全選手に声掛けをし、コミュニケーションを図った。アイシングは必要な道具(ラップや袋)を氷と同じ場所に準備し、いつでも選手が自分でアイシングできるようにした。また、自分で判断がつかない場合や治療が必要な場合にアドバイスや処置を行うようにし

た。これらの取り組みや選手自身が遠征慣れしていたこともあり、選手自ら積極的に体調管理を行っていた。



6. まとめ

三試合を通じ、総合的に感じたことは、選手個々のレベルは北海道の選手達も大きな差はないが、各県トレセンのチームとしてのサッカー、という視点での完成度は大きな差があると感じた。北海道というブロックトレセンが本州では県トレセンという違いは、差を生む要素になっているともいえるだろう。しかし、その差を埋めて行く方法はすぐには見付からない問題である。北海道全体で考えて行くことと同時に、冒頭に明記した目標に向け、北海道代表チームとして限られた回数ของทีม合宿で、出来る限りのことを取り組んでいきたい。

最後になりますが、次年度に向け貴重な時間を頂き全面的なサポートを頂いている全スタッフの皆さん、今回の強化合宿の調整をしていただいた埼玉県の山崎様をはじめ、試合をしていただいた各県スタッフ・選手の皆さま、宿泊先の皆さまにはこの場を借りてお礼申し上げます。